

切な道具なのである。

夏休みが終わろうとする日、三人は、ブルーのミントゼリーとグリーンのリキュールゼリーを混ぜて冷やし固めた、大きなゼリーをスプーンですくって食べる。佳奈特製のそのゼリーは甘くはない。塩味がきいている。

少年は叫ぶ「あ、海、海だ！」

「青と緑の冷たい、しょっぱい、不思議な味の海だ。ぼくらは、頭を寄せあい、時々誰かとスプーンをカチャッとぶついたりしながら、それを食べた。スプーンの上のゼリーは、まるで透きとおった色ガラスのかけらのようなんだ！　ひと口め

は、南の海の波、きらきらしたブルー。ふた口めは、海草の色、謎めいたグリーン。み口めは、深い冷たい水底の色、青緑。」

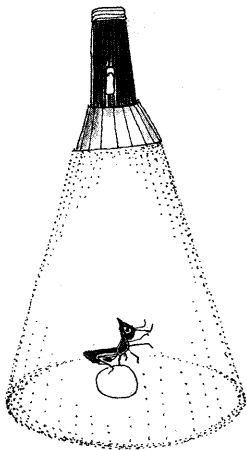
食べれば食べるほど塩からくてじんじんする、小さな海のゼリー。三人いっしょに夏を終える儀式はこうしてなされた。

少年の引越。そして六年後の、夏の日。十二歳の少女が十八歳となり、少年も十九歳を迎えている。少女を乗せた少年の漕ぐ自転車の滑りに、透明な抒情が光る佳作である。

(十文字学園女子短期大学)

たくさんの児童文学を読む

今井 和子



◇「子どもの世界」が見えてくる本

保育所で子どもと一緒に暮らしてきた私は、大人である自分と違う感じ方（考え方）をする子どもたちの世界が面白くてなりませんでした。その違いを発見していくことが、保育の楽しみにもなったようです。読書がその大きな助けになったことはいりません。

かつて、子どもを何とか理解しなければ……と努力していた時は、いわゆる「育児や保育の手引書」や「発達心理学の本」などたくさん読みました。そこで学ぶこともたくさんありました。けれどもそれらの多くは、今思い出しても何が書かれていたのかわからないと思います。ところが、児童文学や実践・研究者などの現象学的な子どもの本は、そこに登場した子どもの姿がはっきり甦（よみがえ）ってきます。自分が出会ってきた子どもたちと重ねあわせて読んでいたからだと思います。そして読み終わったあとは理屈ではなく、心が劈（やぶ）かれて子どもたちを受け入れられるようになっていくから不思議です。今回は、そ

の「子どもの世界が見えてくる児童文学の本」を紹介したいと思います。

◇『きかんぼのちいさいもうと』

私のクラスにのぶちゃんという三歳の男の子がいました。ヴァイタリティがあり、人一倍好奇心も強く積極的に周囲に関わっていたことはよかったです。ですが、その積極性がまっ先に行為に出てしまい、まわりの友だちとトラブルばかりおこすという事態になっていました。友だちと遊びたいのに、遊んでいる子の物を取ってしまうこと、自分の思いが人に通じないと怒って乱暴したり物を投げたりすることなど、行為の理由はわかっているのですが、それがあまりに頻繁（ひんぱん）なのでつい注意することが多くなり、友だちとの関係だけでなく私ともどこかぎくしゃくした関わりになりつつあった時でした。

本屋で『きかんぼのちいさいもうと』（福音館書店）という本を見つけ、ふとのぶちゃんのことを思い出し読み始めました。

この本は、今は大人になっている作者が、自分がかつた頃の、妹のいたずらぶりを思い出しながら語ったもので、妹は、ほんとうに周りの大人を困らせてばかりいました。

どんぐりの種をまこうと、お父さんの花畑を荒らしたり、パーティーによばれてその家の台所にあったケーキをこっそり食べてしまったり、道路工事をしているおじさんたちの昼食の包みをあけてしまうなど、そのいたずらぶりが実に好奇心の強いぶちゃんと似ていました。

読んでいるうちに、幼い子どもたちの感情や行動のありようが、霧が晴れていくようにすうっと見え始め、「これだったのだ」と納得すると、以後のぶちゃんの行為のひとつひとつが愉快でたまらなくなり、笑いながら見られるようになりました。するとたちまち友だちからも彼の行為が受け入れられるようになっていったのです。

主人公のきかんぼの妹は、いつも二つの顔をもっていました。ひとつは、大好きなお母さんやお姉さ

んに対して「いい子でいなくっちゃ」という人に添いたいと思う気持ち。もうひとつは決して大人のいうなりにならないぞと思う反抗的な気持ちでした。それがある時は、大人にたちむかっていく力にもなることを頼もしく見ることができたようです。

幼児は、皆、この妹のように相反する二つの気持ち(甘えと反抗)が葛藤しているようです。この二つの力を、葛藤しながらくぐり抜けていく姿を、幼い子どもたちの共通性として見られるようになったことも収穫でした。

◇大人の内にも息づいている子ども性の探究を

きかんぼの妹とは対照的な素直な女の子の心の内を、やはり文学を通して知ることができました。

『ノンちゃん雲に乗る』(光文社)です。ノンちゃん、自分を困らせるお兄さんや、友だちの長吉と交わりながら彼らの存在の大事さを見つけていく過程、日常の何気ない関わりの中で、子どもは、私達

『芥川龍之介の“保吉”物 三国志』

山本 政人

大人が想像しがたい程のナイーブな感性を働かせながら相手を自分にとりこんでいく姿を見ることができたようです。それによって、日頃の小さな出来ごとを大切に受けとめられるようになったことはいうまでもありません。

児童文学に登場する子どもたちは、ある意味で、作者自身の内に潜む子ども像であること、大人の中

に在る子ども性をどう捉え、表していくかというところがテーマだとすれば、保育者も、自分とは違う子どもを発見しながら、じつは自分の中に息づいている子ども性を再認識していく、自己探究に他ありません。そういう意味に於いては共通のテーマでつながっている喜びを増幅していける世界であり、これからもたくさんの方の児童文学を読みたいと思っています。

(十文字学園女子短期大学)

